Osaka University Knowledge Archive

Title	コミュニケーションのための英語教育をめざしたインタラクション概念の再考ー現象学的アプローチに基づく教室談話の分析を通してー
Author(s)	泉谷, 律子
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77467
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　泉　谷　律　子　）	
論文題名	コミュニケーションのための英語教育をめざしたインタラクション概念の再考 ―現象学的アプローチに基づく教室談話の分析を通して―

論文内容の要旨

本研究の目的は、公教育における英語授業の中で英語非母語話者である教師と生徒のあるいは生徒同士の間での英語主導のやりとりの様相を現象学的に考察し、そのようなやりとりによってどのように学習者が「行為としてのことば」を経験しているのかということの詳細を明らかにすることである。さらに、現実の授業実践において、認知的なSLA研究で「メッセージの伝達をするための双方向の言語活動」にとどまらない実際のインタラクションのプロセスを詳細に見ることでインタラクション概念を再考すること、そして英語教育研究において見過ごされがちな生徒と教師の偶発的なやりとりの言語教育的価値を見直すことである。

この目的を達成するため、３つのリサーチクエスチョンを設定した。

１．中学校の英語授業の場では、どのような英語主導のインタラクションが生徒という当事者と言語使用者としての生徒の現象的身体すなわち英語の「外」の世界との関わりとして観察されるのか。
２．１．の英語主導のインタラクションの中で英語の発声や理解は現象的身体を捉えるどのような出来事とみなすことができるのか。
３．中学校の英語授業の場で、教師とのあるいは生徒同士でのやりとりにおいて、英語主導のインタラクションをするというのはどのような経験なのか。

現象的身体とは、人間を主体として身体を考えるときに、客観的で物理的な身体だけでなく、物理的身体を基盤とした現象的身体をも捉える、両義的身体と捉えるという考え方を指している。英語の「外」の世界とは、その英語を使用している主体にとっての多くの人に共通した行為からはじまり私的世界ではなくなった感覚的世界、のことである。本研究では福田（2010）に依拠し、英語の言葉が学習者の現象的身体である英語の「外」の世界、すなわち学習者の感覚的世界へ解放される出来事を英語の習得と捉える。

本研究は全部で１０つの章で構成され、研究の背景（第１章）、研究の骨組み（第２章から第４章）、データの解釈的記述と考察（第５章から第８章）、まとめ（第９章と第１０章）という４つのパートに分けられる。

第１章では、本研究の研究課題に至った社会的背景および前提について述べた。

第２章では、第二言語習得研究の中で取り上げられるコミュニケーション及びインタラクションについて検討し、その問題点について論じた上で、本研究でインタラクションを扱う観点を明確にした。

第３章では、本研究のアプローチの導入として現象学について説明し、医療・看護分野と教育学分野の現象学的実践研究の一部を応用して、以下のような本研究のアプローチを設定した。

１．本研究は、現象学の事象そのものへ立ち返るという原則に基づいて、生活世界を前提とする日常の生きられた経験をその出発点とする。
２．本研究で自己解釈主体である当事者が存在する生活世界とは、その当事者の日常的な志向性を特徴とする。当事者は現存在としてその実存をディスコースとして印しつつ生活世界に存在している。
３．本研究では、知覚を生きられた経験の基本的な層とみなし、現象学的な分析概念としての身体性、時間性、空間性、関係性に拠って、当該の経験の意味と構成を現象学的に記述することをめざす。
４．生きられた経験の解明のために本研究で着目する英語主導のやりとりとは、2人以上の部分的にまたはすべて英語を使用したターンの応酬で、それぞれの発話がお互いに影響を与え合っているようなやりとり

である。

５．４．の英語主導のやりとりを分析する単位として、社会的性質が生起する、間主観性と相互性が確立する、あるいは意味生成のための能力（capacity)が生起するプロセスとしてのインタラクションに焦点を当てる。

６．２．に関連して、本研究では、さらに当事者がどのような仕方でインタラクションという現象に存在しているかということ、を問う。心境と了解という実存疇を手がかりに、データを分析して得た経験が、教師と生徒のそれぞれの世界内存在としての現存在とどのように関わるのかということを考察する。

第４章では、第３章を踏まえ、具体的な研究のデータとその収集方法、分析の方法について説明した。2015年から2016年にかけて関西圏の公立校で様々な授業を録画したもののなかから一定の共通性を持ち、条件を満たす授業計７回分の授業計約325分を選び出した。これらの授業の録画データを１次資料、それを文字化したデータを２次資料として談話分析を行った。

第５章では、異なる教師の授業における挨拶の経験の構造を現象学的に比較分析することで、生徒の内実に即したインタラクションとはどのようなものかが明らかになった。第５章で選び出した教師の授業を第６～８章で分析し、それぞれ教科書に基づいた質問―回答における相互行為、英語授業で自作の詩を読むという経験、「他人の心を知る」偶発的相互行為を検討した。

第６章では、教科書に基づく質問＝回答の活動におけるインタラクションを分析することでナビゲーターとして位置付けられた教師が教室とその場に固有の正答性を生徒と共に構築し、発音と文法形式への気づきが多層的な時間性の中でもたらされること、また、正しい答えを出すものとして特定の生徒が現象に定位していることを示した。さらに、生徒の日本語とは違う発音への身体的な気づきと文法形式への意識的な気づきの経験が明らかになった。

第７章では、自由度の比較的大きい活動として自作の詩を読む活動におけるインタラクションの経験の構造を明らかにした。その経験では、生徒たちの未来に向かうという時間性と「らしさ」「気持ち」が現れる詩を読む現在という時間性が重なり合っている。次に、なじみのある教室空間、ビデオカメラの視線のある空間、詩を読む舞台という空間、隠された権力性という多層的な空間が舞台にあがる生徒の経験の一部をなしている。さらに、仲間のコミュニティ、教師によって付加されるpoetと詩を聞く人という関係性、生徒の「気持ち」や「らしさ」を生徒達に楽しむという態度を方向づけている教師との生きられた関係という３つの関係性がある。「生きられた経験つまり子どもたちの現実と生活世界」（ヴァン＝マーネン,1990）は、生き生きとした日常のことばで伝えられる場面から検討、記述することができた。

第８章の事例１では、挨拶のやりとりの場面の直後に偶発的に生起した生徒と教師のやりとりの分析を行った。生徒の偶発的な質問から始まったインタラクションが進行する中で、教師と生徒はそれぞれ教師と生徒という役割を志向しつつまたその役割を外す危険も冒しながらルーティーンを拡張していく。教師の様子を通して心的概念を理解していた生徒が、教師に聞き返されることによって、教師から見られる対象としての自己が立ち上がり、自己と往還しつつしている。このようなやりとりを通じて英語の特定の概念に「間主観性と相互性が確立」され、さらに生徒は教師が聞き返しにつかった資源を使いながら、英語を使って教師の心境をたずねるという行為に成功するという、「予測のつかない相乗効果」が産み出される。

事例２では、挨拶のやりとりの場面の中で偶発的に生起した生徒と教師のやりとりの分析を行った。このやりとりでは、生徒が自らの発話「angry」に関連する発話を続け、ルーティーンの終了と授業の主題に入る境界の空間で、生徒の発話が醸し出す不穏な雰囲気に満たされ続けていることが示される。その生徒の発話の理由になりそうな教師の発話と不特定の生徒の発話がもともとの生徒の発話と結びつき、教師とほかの生徒が「angry」である理由を構築することによって時空間の境界が示される。

第９章では、第１節で本研究のリサーチクエスチョンに応える形で第５章から第８章の結果を以下のように考察し、第２節で本研究の意義を示した。

１．(1) IRE/IRF 構造をもつ号令としての挨拶のインタラクションの中で評価をする場合、生徒の発話は現象的身体と密接に関わっているとは言えず、IRE/IRF 構造を外れ時間上緩やかに挨拶場面が拡張していく場合、生徒の現象的身体に根差して発話がされていた。

(2) そのような経験主体としての当事者、当事者の発話、現象的身体との関わりが現れる場にはその教室固有の相貌があるということが明らかになった。

(3) 教師の生徒への特定の態度への方向づけや働きかけが、生徒の現象的身体と言語を関連づける、ということが明らかになった。

２．(1) 生徒が発するそれぞれの言葉は出来事が生成する場所である「外」の世界、すなわち、発話をする生徒の現象的身体とその生徒と関わる他者の現象的身体をめぐる場所に深く関わっているということが明らかになった。

(2) インタラクションの中で英語の発声や理解は、感覚器官の働きを主題化することなく生徒の現象的身体に蓄積していく出来事であった。

３．(1) 教師との英語主導のインタラクションの経験は生徒たちにとって多層的な時間と空間という構造のある経験であり、それはまた、生徒たちの存在の仕方ということである。

(2) そのような経験はインタラクションによる他者と自らの現象的身体の交叉を通した、英語で表される特定の概念の獲得である。

(3) 教師と生徒のインタラクションによって、生徒たちは上述のようなその授業固有の制度化のプロセスを経験している。

(4) 生徒同士のペア活動でのインタラクションは、言語で表現する以前の習慣による間身体的な経験を含む。

(5) 教室の中で舞台に立たされる生徒と聴衆としてその生徒に対峙する他の生徒のインタラクションの経験には多層な時間性、空間性に加え、生徒同士の多層な関係性という構造がある。

本研究の第１の意義は、現実の授業実践に基づいて英語を使ったやりとりを生徒がどのように経験しているかに迫ることにより、これまでとは異なったインタラクション概念についての理解から授業を考察するということであり、そうすることによって、英語習得の萌芽を促す授業実践を見つけ、そのような授業実践をより生徒の内実に即したものにするための理論的基盤を強固にすることができた、ということである。第２の意義は、学校英語教育研究において授業の一場面を切り取って現象学的アプローチを用いた授業談話研究のモデルを提示したということである。

第１０章では、本研究の今後の課題を２つ示した。１つ目には、教師と生徒とのインタラクションの中で教師の経験が重要であることが分かってきたが、本研究の目的とはずれていたため、教師の経験について焦点を当てることができなかったことである。2つ目には、本研究で明らかにしようとした経験は、厳密に言えば研究者としての筆者の観察、分析と考察のレンズを通した生徒たちの経験であるという限界がある。さらに現象学的記述を深めるためには、研究過程における研究者自身の経験にまで視野を広げることによって、得られる知見に厚みが増すと考えられる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　泉谷　律子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	西口光一
	副 査　准教授	秦かおり
	副 査　教授	日野信行

論文審査の結果の要旨

「授業は英語で行うことを基本とする」という方針が高等学校学習指導要領（2008年3月）で示されて以来、英語教員や英語教育関係者の間では「英語での授業」をめぐってさまざまな議論が交わされている。そして、「グローバル化に対応した英語教育改革への5つの提言」（英語教育の在り方に関する有識者会議、2014年）で中学校でも同方針で授業が行われるべきことが提案されおり、来年度から全面実施の予定がされている。さらに、「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業　平成27年度報告書」（東京学芸大学）では、生徒が「英語でインタラクションをする能力を身に付ける機会を確保する」ことや、教師には「生徒に対して理解可能な言語インプットを与え、生徒の理解を確かめながら英語でインタラクションを進めていく柔軟な調整能力も必要である」とインタラクションということが「英語で授業を行うこと」の焦点として浮上してきている。そうした背景を踏まえた本研究は、中学校英語授業での英語主導のやり取りに注目して、授業の中での英語主導のやり取りを生徒がどのように経験しているかを記述することを通して英語主導のやり取りの経験的な内実を明らかにしようとする試みである。そうした目的のために、本研究では現象学的な見方を援用して生徒の現象的身体がそうした英語主導のやり取りを現実構成の契機としてどのように世界を構成してそれを経験しているかを主要な視点とし、談話分析の手法も適用して、生徒による英語主導のやり取りを考究している。

そのような見方に立つ本研究では、冒頭から授業における経験ということが注目される。そして、コミュニケーションと対比したインタラクションを言語非言語にかかわらず、与えられた影響に応じての影響の与え合いであり、予想のつかない相乗効果を生み出すプロセスとして捉えることを述べた上で、応用言語学及び教育学での教室談話の先行研究を検討し、また本研究での現象的身体の経験を通した言語習得観を明らかにして、本研究のこれまでにない独自性を浮かび上がらせている。第３章では本研究の理論的基盤となる現象学の見方を概観し、さらに看護・医療現場をめぐる現象学的な研究の方法や教育における現象学的アプローチなどに分け入り、最終的にヴァン・マーネンが提唱する経験、知覚、身体性、時間性、空間性、関係性の視角から英語主導のやり取りの経験を分析するという本研究のアプローチを提示している。こうした問題の捉え方は斬新であり、そのための先行研究の把握と解釈も適当に行われており、その問題意識に適切に取り組み得るアプローチを提示するに至っていると評価できる。

収集された４人の教師による７回の授業（計約325分）の中で観察された３つの英語主導のやり取りのシーンをまずは談話分析の手法により分析し、さらに上記のように現象学的に分析した結果、形式的なやり取りから生の現象的身体が関与するやり取りへ緩やかに移行したり、生徒が唐突に自身の身体状況や心理状況を提示したり、教師主導の流れにおいて切り返すような形で教師の生の現象的身体と交叉する問いかけをしたりするなどの現象が詳細に記述され捕捉された。また、教師の少し強引とも見られる英語の言葉による言寄せにより多かれ少なかれ生徒が自身をその言葉の言及先として経験したり、同じ言葉を現象的身体と交叉させながらのやり取りでことば行使の経験を蓄積したりする状況などもその詳しい様態の記述とともに提示された。同時に、英語主導のやり取りはただ平板な言葉の取り交わしではなく、行為としてのことばの経験らしく時間的にも空間的にも輻輳した出来事を生徒たちに経験させていることが現象学的な分析によって巧みに記述されている。これまで比較的漠然と議論されてきた英語によるインタラクションというものをこのように精細に観察し、いくつかの事例に関してその経験の構造を解明したことは本研究の成果であり、学術的及び教育実践的な価値がある。

本研究が基盤とする現象学についての論述にやや明瞭性が欠けること、研究方法で言及された視角のトライアンギ

ュレーションが十分に活用できていないこと、談話分析の部分と現象学的な分析が必ずしも密接に接続できていないことなどいくつかの課題はあるが、本研究の価値を損なうものではない。以上のような理由で、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。